

『有罪証明～ギルティ～』

著：愁堂れな

ill：稲荷家房之介

翌朝、いつものようにルームサービスの朝食をとりながら、俺たちはようやく会話らしい会話をし始めた。毎週会った途端に互いを激しく求め合うセックスへとなだれ込んでしまうため、話をするのは翌日の朝食の席で、というのが既に俺たちの間では慣習になりつつある。

「そーいや、前の係長は左遷らしいな」

トーストにバターを塗りながら、泰隆がさもなんでもないことを話すような調子でその話題を出した。

「よく知ってるな」

感心してみせた時点で肯定しているようなものだが、まあ、隠すことでもないだろうと思いきや、

「ヤクザの情報網は警察に勝る」

泰隆は、にや、と笑って答えたが、実際彼の言葉には少しの誇張もないのだった。

「例の件で詰め腹を切らされたんだそうさ」

「新しい係長はキャリアらしいな。将来の幹部候補とか」

「……本当に警察に勝るんだな」

発令があったのは先週で、週明けに来るといふ新しい係長についての情報はまだ、俺の耳に入ってなかった。

それをもう外部の人間——しかもヤクザである泰隆が知っているとは、と心底感心していた俺の前で泰隆は苦笑すると、トーストを皿に置き、手を伸ばして俺の額を小突いてきた。

「単にアンテナを張ってるだけだ。お前も少し周囲に目を配ったほうがいい。痛い目に遭ってるんだから」

『痛い目』というのは、まさに先ほど俺が『例の件』と言葉を濁した件で、かつて同じ係に所属していた同僚が、ヤクザと癒着していたことを指していた。俺はそいつに濡れ衣を着せられた挙げ句、殺されそうにもなったのだが、耳が痛いことを言われるのはやはり好まない。

それゆえ、この話題はここで終わりにしようとし、逆に彼に関するに俺は話題を振った。

「お前のほうはどうなんだ？ 相変わらず睨(にら)みを利かせてるのか？」

「……………」

そのとき俺の目には、泰隆が何かを言いかけたように見えた。が、次の瞬間には彼はいつものごとき余裕の笑みを浮かべ、肩を竦(すく)めていた。

「別段、変化はないな。他団体との小競り合いも、鉄砲玉に狙われるのも日常茶飯事だし」

「酷い日常だ」

泰隆は淡々と答えていたが、日常的に命を狙われているという状況はどう考えても

普通じゃない。だがそれは警察官——というより、一般人としての感覚らしく、泰隆は、「そうか？」

と笑うと再びトーストにバターを塗り始めた。俺も彼の真似をし、バターを塗る。

「ほら」

と、目の前にバターを塗ったトーストが差し出され、俺は、はっとして彼を見やった。

「なに？」

「食べよ」

「お前が食べばいいだろう」

「お前のためにバターを塗ったんだよ」

いいから食べ、と無理矢理に泰隆は俺にトーストを押しつけたあと、椅子の背もたれに身体を預け、ふっと笑った。

「確かに、お前から見たら酷い日常なんだろうな。何せ、日々命の危険に晒(さら)されている」

「……それは刑事も一緒だ」

気づかぬうちに泰隆を傷つけたか、と察し、フォローの言葉を告げる。それがあまりにもわざとらしくかったからか、泰隆は苦笑すると、コーヒーカップを手に取り一口啜(す)った。

沈黙が二人の間を流れる。

ヤクザと刑事。それぞれの周囲に二人の付き合いがバレたら、相当マズいことになるという自覚はお互いに持っていた。

それゆえ、こうして人目を忍んで会っているわけなのだが、俺個人としては泰隆との付き合いをそれほど隠したいという気持ちはなかった。

高校時代の同級生であるのは事実なのだし、警察の内部情報を漏らすなどの疚(やま)しいことは何もしていない。

かえって彼から警察内の情報をもらっているくらいなのだから、と泰隆を見やると、彼もちょうど視線を上げ俺を見たところだった。

二人の視線が絡み合い、やがて互いの顔に笑みが浮かぶ。

「食べよ」

泰隆が目皿の上のトーストを示す。

「ああ」

頷(うなず)いたあと、俺は手に持ったままでいた自分のトーストに手早くバターを塗り、彼の皿に置いた。

「俺はいい」

「お前のために塗ったんだ」

さっき彼が言ったのと同じ台詞を返してやると、泰隆が苦笑しトーストを手を取った。俺も彼がバターを塗ってくれたトーストを同じく手に取る。

「お前、両面に塗るのか」

泰隆が驚いたように問いかけてきた。

「ああ」

「普通、片面だろう？」

「両面塗ったほうが旨いと思う」

「それは個人の好みだろう」

内容が殆どないような会話が二人の間で始まる。

話さなくてはならない話題から逃げている、という自覚はあった。話し合ったところで何ら解決策がないということはお互いにわかりすぎるほどにわかっているため、どちらかがそこへと触れそうになると、二人して口を閉ざし、別のどうでもいいような話を始める。

避けている話題は、二人を取り巻く環境の違いについて。そして二人の未来について——ヤクザと刑事、いわば水と油ともいうべき立場については、話し合うだけ無駄であるということは、確認をとるまでもなくわかっていた。

同じ理由で二人の将来についてもまた、話したところで何も得られるものはない、と二人は理解していた。

俺が警察を辞めるか、泰隆がヤクザを辞めるか。選択肢はその二つしかないというのが泰隆の意見であり、俺の意見でもあった。

否、正確に言えば、俺は別に、ヤクザと刑事が付き合い続けるというのはアリだろうと思っていた。が、泰隆に『常識的にあり得ない』と呆れられた上で、刑事を続けたいのなら余計なことは言わないほうがいいと諭された。

確かに、ヤクザとの癒着を疑われたために左遷された過去を思うと、泰隆の主張は誤りではないと俺にもわかる。わかって尚、疚しいことは何もないのだから、泰隆との付き合いを隠したくないとする俺の主張と、泰隆の主張は常に平行線を辿(たど)っており、決して交わることがないので、その話題が出ると俺たちはこうして互いに口を閉ざすのだった。

「手が汚れる」

今日もまた早々に会話を打ち切った泰隆が、わざと作ったと思われる非難めいた眼差しを向け、バターのついた手を示す。

「舐めればいい」

「舐めてくれよ」

ほら、と泰隆が差し出してきた手を、ぺろりと舐めてやったのは、ほんの悪(いた)戯(ずら)心からだった。

「……淫靡だな」

泰隆がにやりと笑い、俺を見る。

「淫靡？」

何が、と問うと泰隆はトーストを皿に戻し、膝に置いたナプキンで俺の舐めた手を拭いながら立ち上がった。

「え？」

テーブルを回り込み、俺の横に立った彼に手を取られ、なんだ、と見上げると、泰隆はまたにやりと笑い、思いもかけない言葉を口にした。

「欲情した」

「なに？」

意味がわからず問い返したときにはもう、泰隆に強く腕を引かれて、無理矢理椅子から立ち上がらされ、彼の胸に抱き込まれていた。

「おい」

顔を上げたと同時に泰隆の手が俺の手首を掴み、指先を口へと含む。何をしているんだ、ときよっとし声を上げたはずなのに、熱い泰隆の口内を感じた途端、ぞく、と悪

寒によく似た感覚が背筋を走り、身体がびくりと震えてしまった。

「……………」

俺の指を啜(くわ)えたまま泰隆がにやりと笑い、ゆっくりした動作で一本ずつ舐り始める。

「よせ」

引こうとした手をしっかりと握って捕らえ、泰隆が俺の人差し指を、続いて中指を舐っていく。制止の声が掠(かす)れている時点で説得力がない、と自身に呆れながらも俺は、強引に彼の手を振り払うとその手を泰隆の背へと回して抱き寄せ、わかった、とばかりに微笑み落としてきた彼の唇を受け止めたのだった。

本文 p19～26 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>